「さわった人たちはみな癒やされた」

マルコの福音書 6 章 56 節
「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。」

病人たちが広場に寝かされて、その広場をイエス様がお通りになり、イエス様の衣の端の房が触れるだけで、人々は癒されたというのです。イエス様は触れるだけで人びとを癒す力を持っていました。人々はそのことを知っていたのです。マルコの福音書 5 章では、12 年の間、長血を患っていた女性が、こっそりうしろからイエス様の衣に触れて、癒された出来事が記されています。人々はその噂を聞いていたのでしょうか。村でも町でも里でも、至る所で、病人たちがイエス様のもとに連れて来られたのです。そして、みな癒されたのです。

私たちはイエス様に癒しを求めているでしょうか。私は健康だからその必要はない。今のところは大丈夫。人生上手くいっている、日々の生活に満足している。なんとか自分の力でやっていけそうだ。そんな風に思うでしょうか。
順調だと思っているときに、誰かに助けを求めるということはあまりないでしょう。むしろ、もっともっと自分の力で、自分の思い通りに、前に前に、上に上に、進んでいけるんではないか、上って行けるんではないかと自信にあふれていることでしょう。
しかし、私たちは考えてみたいと思います。私たちは誰でも自分の力だけでは生きていくことができないのではないでしょうか。私の力には限界があります。自分は力があると思っていても、自分の弱さに気づかされることがあります。大丈夫だと思っていても、いつ健康が損なわれるかわかりません。いつも、いつまでも、自分の力でなんとかなるだろうというわけにはいかないのです。

例えば、今年の夏の暑さの中、私たちはどのように過ごしているでしょうか。日中、少し外に出ているだけでも倒れそうになってしまいます。ですから、私たちは倒れないように色々と対策を考えます。なるべく外に出ないように、エアコンを使ったり、外に出るときには日傘を差したり、水分補給をしっかりしたり、またうちに帰ってきたらしっかり休む、食事を取る、睡眠を取るとかです。

一生懸命に自分を守る対策をします。

そのように私たちは何とか自分の身を守ろうとするのですが、それでも体調を崩してしまったり、病気になったり、思わぬ事故に遭い、怪我をしてしまうということがあります。

私自身も、1週間ほど前、夏の暑さと疲れが溜まってか少し体調を崩したことがありました。そうなると、神様に助けを求めます。「神様、どうか癒してください」、「回復させてください、力を与えてください」、「いつも通りの生活ができるように、元気になるように助けてください。」

そんな風に祈りながら、自分の弱さ、無力さ、惨めさを思い知らされるわけです。

本日は障がい者福祉礼拝です。私たちは障がい者でしょうか。私たちは健常者でしょうか。

私たちは誰しも完全ではありません。それぞれ、身体的な違いがあります。能力の違いもあります。弱さがあり、強みがあります。子どもであれば未熟さがあります。年を重ねていくと衰えが出てきます。誰であっても、病気にならないということはないでしょうし、怪我をしないということもないでしょう、人生の中で身体が不自由になるということもほとんどの人が経験することだと思います。

そのように考えますと、私たち、すべての者が誰かに助けられて、今生きている存在であり、何よりも主なる神様からの助けが必要であり、今まさに主に支えられて生きてる存在であり、弱さを持つ私たちは、イエス様に癒しを求めることが必要なのではないでしょうか。もし私たちが求めるならば、イエス様は癒しを与えることのできるお方です。

イエス様の癒しのわざを見てみましょう。マルコの福音書2章です。

カペナウムという場所で、一人の中風の人が4人の人に担がれてイエス様のもとに連れて来られました。するとイエス様は言いました。

マルコの福音書2章5節。

「イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われた。」

そして続けて 2 章 11-12 節。

「「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめた。」

中風という体が不自由になる病気を患った男性が癒されました。立ち上がって歩き出したのです。人々は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめるほどでした。

次にマルコの福音書 5 章での出来事です。12 年の間、長血をわずらっている女性がいました。

マルコの福音書 5 章 27-29 節。

「彼女はイエスのことを聞き、群衆とともにやって来て、うしろからイエスの衣に触れた。「あの方の衣にでも触れれば、私は救われる」と思っていたからである。すると、すぐに血の源が乾いて、病気が癒やされたことをからだに感じた。」

癒された女性はすぐに立ち去ろうとしたのですが、イエス様は「だれがわたしにさわったのか」と周囲を見回したので、女性は恐れおののきながら、イエス様の前にひれ伏しました。そしてイエス様は言われました。

5 章 34 節。

「イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」」

今度は長血をわずらった女性が、イエス様に触れると出血が止まり、癒されたのです。中風の男性が癒される出来事と、長血をわずらった女性が癒される出来事、2 つの出来事を通しても、確かにイエス様は、癒しをもたらすことのできるお方であるということがわかります。そしてもうひとつ分かることは、癒しを求める者には信仰があるということです。

中風の人の癒しの場合は、本人ではなくて、友人たちが癒しを求めて、主に助けを求める信仰を持っていました。

「「イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われた。」」

そして長血をわずらった女性の場合は、自ら信仰を持ってイエス様に助けを求めました。「イエスは彼女に言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい。苦しむことなく、健やかでいなさい。」」

中風の人の友人達と、長血をわずらった女性は、ただ病気を治してもらうためだけにイエス様に助けを求めたのではなかったのです。
彼らは、病の中で、人の弱さの中で、人間の本質的な弱さを思い知らされ、それまでの高ぶった思いが打ち砕かれ、人は神の力によってでなければ生きていけない存在であるのだという信仰に至り、自分の力で生きることはもちろんあきらめ、他の者や人に頼ることもやめて、ただただイエス様の前にへりくだって、信仰を持って、イエス様に助けを求め、イエス様の力を求め、イエス様の愛とあわれみにすがったということなのではないでしょうか。

イエス様は確かに、病気を治されました。しかし、イエス様の癒しのわざの本質は、その人の主に頼る信仰を見て、それまでは自分の力に頼り、自分勝手に生きていたという罪に対して、赦しを与えるということだったのです。

人は自分の弱さに向き合うときに、それまでの自分の罪深さを示され、イエス様に対する信仰を持つことになるのです。自分の強さに信頼し、自分の力でやっていけるという自信を持ち、イエス様を必要としない人生から、信仰を持って生きる人生へと変えられるのです。

もし私たちが、自分の弱さを自覚し、イエス様によって癒される経験をするならば、イエス様の温かい愛に包まれ、不思議な平安の中に導かれることでしょう。ると同時に、イエス様が与えてくださる平安を確信、イエス様の愛の御手にゆだねる。そして、これからは自分の力によって生きるのではなくて、イエス様の力によって生かされていくのだと思わされることでしょう。それが私たちに与えられる本当の癒しです。

人は病を通して、身体の弱さ、不自由さを通して、主の前にへりくだることを教えられるのです。それまで自分が持っていた、自分の力や自信や自分中心のライフスタイルを捨てさせられるからです。それまで自分は何に頼っていたのだろうかと、何に信頼し、何に価値を置いていたのかを問われるのです。

そして改めて、自分にとって何が本当に大事なものなのか。自分は何によって生きているのかを考えさせられるのです。

私たちは悟るのです。主なる神様に立ち返り、主なる神様との正しい関係を求めるようになり、主なる神様に癒しを求めるようになるのです。そして私たちは癒されるのです。

マルコの福音書 6 章 56 節
「村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、人々は病人たちを広場に寝かせ、せめて、衣の房にでもさわらせてやってくださいと懇願した。そして、さわった人たちはみな癒やされた。」

癒された病人たちは、主にあって生かされていることを感謝するとともに、イエス様のあわれみと大きな愛に触れて喜びに満たされたことでしょう。そして、それからも、感謝と喜びに満たされ続けて生きることになったのではないでしょうか。
そうであるならば、自分は、元気で、不自由なく、思い通り、好きなように、自分の力で楽に生きていけると、いわゆる自分は健常者だという生き方をしている人よりも、いわゆる障がい者として自分の弱さを認め、主に助けを求め、主によって生かされている人こそ、本当は主にあって健康であり、本当の自由を知っており、本当の生きる意味を知っており、本当の喜びに満たされた人生を生きているのではないでしょうか。

イエス様に癒されるということは、神さまの愛に包まれるということなのかもしれません。私は星野富弘さんの詩を読みながらそのように思いました。
多くの方がご存じのように、星野富弘さんは、中学校の先生として教えていた体育の授業中に大けがをして、手足が不自由になってしまいました。しかし、口にくわえた筆で素晴らしい詩と絵を残されました。

星野富弘さんの「愛されている」という詩をご紹介します。
「愛されている」
どんな時にも　神様に愛されている　そう思っている
手を伸ばせば届くところ　呼べば聞こえるところ
眠れない夜は枕の中に　あなたがいる

私たちは、すぐに体を動かして、あれをしたい、これをしたい、あれをしなければ、これをしなければ、何かをやらなければ、自分の価値や自分の存在を認めてもらえないのではないかという恐れがありますが、星野富弘さんには恐れや不安がありません。
神様に愛されているという平安があります。

「どんな時にも　神様に愛されている　そう思っている」

主に癒されて、主に生かされいる者の姿を、星野富弘さんの詩を通して教えられます。

イエス様も、人々が「神様に愛されている」そう思って生きることができるように、癒しの働きを続けられたのではないかと思います。主なる神様は私たちを癒し、神さまの愛でつつんでくださるお方です。

詩篇 147 篇 3 節。
「主は心の打ち砕かれた者を癒やし　彼らの傷を包まれる。」

イエス様の時代の人々だけではありません。旧約の時代から、そして現代に至るまで人々は、主なる神様の癒しと愛を必要としているのです。
主なる神様の癒しと愛を必要としているにもかかわらず、罪深い人類は、それでも自分の力でなんとか解決しようとし、一生懸命に自分の力を強めようとし、あるいは何か他のものに頼ろうとしますが、解決することができずに、余計に苦しくなり、もがき続けます。
そのような的外れな人類の救い主として、この世に来てくださったお方がイエス・キリストです。

イザヤ書 53 章 4 節前半。
「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。」

なんとかしようと一生懸命になればなるほど神様から離れてしまう罪深い私たちのために、イエス様が私たちを救いに来てくださいました。イエス様が近づいて来てくださり、イエス様が私の病を負ってくださり、私の痛みを担ってくださるのです。

イエス様に救われるために、イエス様に癒されるために必要なことは、助けに来てくださったイエス様に、助けてくださいと言うことです。弱さをさらけ出し、私の病を負って下さい、私の痛みを担ってくださいとお願いすることです。そして癒しを求めることです。

Ⅱコリント 12 章 9 節後半。
「ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

私たちが癒されるためには、見せかけの強さを捨てて、自分のうちにある弱さを誇る必要があります。
しかし、強さを捨てて、弱さをさらけ出すということが簡単にはできない私たちです。ですからイエス様も教えています。

マルコ 9 章 43-47 節。
「もし、あなたの手があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろっていて、ゲヘナに、その消えない火の中に落ちるより、片手でいのちに入るほうがよいのです。
もし、あなたの足があなたをつまずかせるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろっていてゲヘナに投げ込まれるより、片足でいのちに入るほうがよいのです。
もし、あなたの目があなたをつまずかせるなら、それをえぐり出しなさい。両目がそろっていてゲヘナに投げ込まれるより、片目で神の国に入るほうがよいのです。」

イエス様は、自分の強さに頼ってはならない。自分の弱さを自覚しなさい。自覚できないならば、手を切り捨て、足を切り捨て、目をえぐり出してみなさいと、厳しく教えました。それほどまで、私たちにとって弱さを知るということが大事だということです。

罪深い私たちは、いつもいつも自分がどれほど強いか、立派であるかを考えてしまいます。人と比べて誰が一番優れているのかを考えてしまいます。イエス様の弟子たちのようです。しかし、幼子や、身体の不自由なご高齢の方、障がい者や障がい児というこの世の中で弱さを抱えている方々と接するときに、どうでしょうか。自然と自分も弱さを認められるような気持ちになることがないでしょうか。

カトリックの司祭でもあるヘンリ・ナウエンは晩年になって、知的な障がいを抱える人々と共に生活をする「ラルシュ・デイブレイク」という施設で 10 年間過ごします。ナウエンは、そこでの一人の青年アダムとの出会いを書き残しています。
「アダム　神の愛する子」というタイトルの書籍が出版されています。

ナウエンは障がいを抱えた青年アダムがイエス・キリストの似姿に見えたと言います。アダムを通して、神を知り、そしてイエス様が実際に地上に生きたのははるか昔であったが、アダムの存在を通して、イエス様が今一緒に、同じ時代に生きていることを感じたというのです。
ラルシュの共同体の精神においても、知的な障がいを抱える人々は、もてなし、好奇心、自然さ、素直さという資質を持っており、周りの人々に心の本質的価値を思い起こさせる生き証人であると言われます。

イエス・キリストは権力と力に包まれてやって来たのではありませんでした。イエス様は弱さをまとって来ました。そして青年アダムもまた、英雄的な資質など持っておらず、新聞が優れた者として書き立てそうなことにも縁がありませんでした。けれども、アダムは自分の破れを通して神の愛を証しするように選ばれたのだと、ナウエンは確信します。

ナウエンは言います。
私たちすべてと同じく、アダムは限界を持つ人間だった。大部分の人よりさらに大きな限界を背負っており、言葉で自分を表現することができなかった。しかし、彼はまったき人間であり、祝福された男でもあった。
アダムのおかげで、私たちは、神の無条件の愛の一端に気が付くようになった。アダムの存在と価値は私たちを照らし、私たちも彼のように恵まれ、愛されている神の貴重な子どもであることを理解させてくれることになった。
アダムはこの世に福音をもたらすために派遣された。「私は神から生まれた貴重で完全な愛された者だ」という神秘を告げ知らせる人だった。
アダムはこの神秘に対して沈黙の証しを行った。アダムはただそこにいるだけだった。アダムは真の教師であり、真の癒し人であった。その癒しの大半は、自分の傷をなかなか受容できずにいる人々に平和・勇気・喜び・自由を告げ知らせる内的な癒しだった。

そしてナウエン自身も癒しを経験します。ナウエンは告白しています。

ラルシュでの共同生活を始めた、最初には、誰が障がいを抱えているか、そして誰がそうでないかは極めて明白だと思っていた。しかし、明けても暮れても一緒に暮らす中で、その境界線は明瞭ではなくなっていった。

自分も生活の中で助けを必要し、自己吟味をする中で、自分の情緒的貧困さ、祈れないこと、落ち着きのなさ、不安や恐れを抱えていること、見えにくいけれども、新しい意味で自分も障がいを抱えているのではないかと考えさせられた。

競争や人を出し抜く術、名声に対する重圧の存在しないこの愛と心遣いに溢れる環境の中で、私はそれまで見たり経験したりできなかったものを経験した。

弱い私自身と向き合うことができた。私は深い人間的苦闘を経験していた。たとえ誇れるものが何もない時でさえ、自分が愛されていることを信じようとする苦闘だった。

ナウエンは知的障がいを抱える青年アダムとの共同生活を通して、自分の弱さ、見えない障がいを自覚し、深い人間的苦闘を経験し、そして癒され、神の愛に至るのです。

私たちもそのような経験が必要なのかもしれません。しかし、ナウエンのようにカナダのラルシュにまで行く必要はありません。

土浦めぐみ教会には、からしだねがあります。からしだねには、毎日数名の子ども達が集まっています。教会にからしだねという場所がある、働きがあるというのは本当にめぐみだと思います。

先週配られた、金尾所長の笑顔の写真の載っている「ともに生きる」をご覧になられたでしょうか。からしだねの働きの報告と共に将来の妄想が書かれておりました。

せっかくですので、ご紹介させていただきます。

「いつも「からしだね」の歩みを覚えて、お祈り・お支え下さり有難うございます。おかげさまで１学期を無事に終え夏休みを迎えることが出来ました。朝８時～夕方６時まで、さまざまなプログラムを工夫して（カレー・餃子・ピザ・パン作り、懐かしい「からしだねセカンド」・職員宅訪問など、もちろん宿題も）和気あいあいと過ごしています。

そんな中、8 月 13 日にからしだねの歩みを 1 日休んで職員研修の時をもちました。テーマは「キリストにある事業としての新しいからしだねを目指して」でした。

最初に、「赦された」と「赦した」の証を互いに分かち合い、「赦し」「赦され」の恵みを味わいました。

次に、それぞれが事前に考えポストイットに書いてきた「こんなからしだねがいいな！」という妄想をホワイトボードに貼り付け、グループ分けしました。（子ども達が書いた願いもありました。）

大きく分けると、①近い将来こんな建物やスペースがあったらいいな。②近い将来こんな物や設備があったらいいな。③近い将来こんなプログラムがあったらいいな。④将来こんな場所があったらいいな。⑤将来こんな人がいたらいいな。⑥将来こんな働きが出来たらいいな。⑦具体的ではないが、将来こんな風になれたらいいな。

全部で 70 妄想（お金がかからず、自由に発想し、責任をとらなくて良い）が出る、楽しいひとときでした。妄想が暴走になることなく実現に向かうようお祈り下さい。」

妄想が暴走になることなく実現に向かうように、ぜひからしだねの働きのためにお祈りください。そして私たちもからしだねの働きに少しでも触れることができれば良いなと思います。

からしだねは癒しの空間です。子どもたちや職員にふれると癒される、癒しの場です、神様に愛されている子どもたちや職員の姿を見て、私たちも、ただ愛されていると実感できる場所です。

からしだねが、これからもそのようなからしだねである続けるということが私の妄想です。からしだねがもたらす癒しの力がこれからも教会に広がり続け、地域に広がり続けることを願っています。